

優秀賞 [高校生の部]

祖父母が守ってきた里山を残したいという筆者の思いを、里山、自然環境の保護への力強い提言にまとめたことが共感を呼びました。

NFJ 学生小説コンテスト2012
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会
私たちがすべきこと、できること、
やりたいこと
入賞作品

日本から
未来を
提案しよう



次世代に残す「里山」

——コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

神奈川県立中央農業高等学校 2年

谷口 淳人 たにぐち あつと

私の父母の実家は福井県にあります。谷口の家は代々続いた農家で、ご先祖様の住んだ家が越前市の味真野苑という公園の中に「旧谷口家住宅」と名づけられ、国指定重要文化財として保存されています。これは19世紀の越前平野によく見られた角屋（ついや）形式の民家のもっとも発達した住居だということです。この家には昭和50年頃まで親戚の人が実際に住んでいました。当時は田圃の広がる風景の中に茅葺の民家がよく似合っていたそうです。

同じ越前市内で私の祖父母も農業を続けてきましたが、平成22年の12月に交通事故

にあい、二人とも亡くなってしまいました。まだ私が高校に入学する前のことでした。そして今、祖父母が耕してきた田畑と山が残されています。私の父は神奈川県で高校の教員をしています。母と兄と私の4人家族は神奈川県で暮らしており、田舎の田畑は祖父母が守っていたのですが、突然の祖父母の死によって実家は住む人を失い、田畑もどうしたらよいものか、父母も困ってしまいました。しかし、田圃を荒らすわけにはいかないのので、地元で集団営農をする人たちにお願ひして、実家の田圃を耕作してもらっています。

祖父は長い間消防署に勤め、10年ほど前

次世代に残す「里山」

——コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

に退職してからは、毎日のように山に入り下草を刈り、雑木を伐採したりして山の手入れを続けました。近所の人々が「谷口さんちの山が一番きれいだ」と言ってくれるほどでした。私たち兄弟が生まれた年には、それぞれ杉の苗木を300本ほど、記念に山に植林をしたそうです。生前に祖父母と山に登って見に行ったときには、直径15cmくらいに育っていました。また山の斜面にシイタケのほだ木をならべてあり、毎年おいしいシイタケができました。私が幼稚園の頃に山に行くとアケビの実がなっていて、祖父は高い木にはしごをかけてスルスルと登り、とってきてくれたことを覚えています。田圃では、一番山際の、山からの湧き水を引き入れる田圃でとれる米が一番おいしいと祖父はいつも言っていました。実は山からの水は水温が低く、苗の管理はすごくむずかしかったのです。それでも祖父は他の田圃より多い収穫量を上げていたそうです。

私たち兄弟が夏休みや春休みに田舎に帰ると、祖父は軽トラに私たちを乗せて、よく畑や山に連れて行ってくれました。スイカをとったり、カボチャをとったり、作業の手伝いをしてほめられました。小さい頃に稲刈りのコンバインに乗せてもらっている写真が今も手元にあります。私が農業に興味を持ったことには、この経験の影響があると思います。農業高校を受験することを決めて、その気持ちを話す前に祖父母が亡くなってしまったの

で、そのことを聞いたらどんなに喜んでくれたかなあと今も心に残っています。

私は現在農業高校の2年生。園芸科学科に在籍しています。日々の実習でトマトやキュウリを作ったり、バイオ技術で絶滅危惧種の植物を培養する研究をしたり、農薬や化学肥料の安全性について学んだりしています。私は将来「自然環境を守る農業」、つまり環境汚染のない農業の実践をしたいと考えています。今年の東日本大震災に伴う原発事故により、放射能汚染の問題が起きました。放射性物質による汚染は非常にまれな例ですが、食料の生産基盤である土壌や水が汚染されると、その生産物の安全性は損われます。この主な汚染源は化学肥料と農薬です。これからの農業では、いっそうの食の安全のために有機肥料を主として、農薬もより安全性の高い物を改良していくべきだと思います。

福井県内では現在、有機肥料を用いた特別栽培米が推奨されており、実家の田圃でも「エコハナ一番」という有機肥料を使っています。化学肥料をやめて有機肥料の使用が広まったため、ドジョウやオタマジャクシが田圃に増えたそうです。50年近く前にコウノトリが越前市に棲みついたことがあり、父も子供の頃に間近でコウノトリを見たそうです。それで越前市では以前から、コウノトリが息できる環境を再生しようという活動が行われているのですが、今年になって、実家の田圃の

次世代に残す「里山」

——コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

あたりでもコウノトリの目撃情報がありました。これは確実に自然環境が改善されていることを意味します。

先日、日本の原風景として「里山」を取り上げるテレビ番組を見ました。それは岡山県にある棚田の風景でした。実家のある越前市は全体が盆地で、祖父の家は大虫町というところにあります。市の中心からだんだん標高が高くなり、一山越えると越前海岸へ続く位置にあります。いわゆる中山間地域と呼ばれる地形で、近くに大虫の滝という小さな滝があります。その流れが小川になって町内を流れています。田畑を取り囲んで山林があり、昔から人々が山の木々を生活に利用してきました。テレビで見る「里山」の風景はまさに私のふるさとの田圃や山の景色です。私は「里山」についてインターネットで調べてみました。日本の国土の約4割が「里山」といわれる地形です。昔から人々の生活の場として、人が手を加えてきた二次的な自然林ということができます。ここでは人間と動植物の「持続可能な共生生活」が成立していたのです。実家の田畑にはイノシシが出ますし、猿が出ることもあるそうです。父は以前、祖父と山に入ったとき大きなニホンカモシカを見たと言いました。福井県内ではシカというとカモシカのことなのですが、祖父は山で何度もシカと会っています。あるとき子牛ほどの大きなオスジカと出会い、にらみ合いになったそ

うです。どうして逃げないのかと思ったら、その後ろにメスのシカもいて、メスを安全に通らせる間、オスジカが前に出て頑張っていたそうです。

また、山の中では木の実や山菜がとれたり、カブトムシを捕まえたりもします。小学生の頃、実家の山でミョウガを摘んだり、ゼンマイをとったりしました。家族みんなで大きなカゴに何杯もとってきたミョウガをパックにつめて青果市場に出したこともあります。

「里山」はこのように人間と動植物が関わる貴重な自然環境です。代々、谷口のご先祖様が守ってきた杉やヒノキの山林は、祖父の代で新たに植林した部分があれば、樹齢が100年を超えるような樹木もあります。祖父が新たに植えた杉も約20年がたちました。祖父は一人で雑木林もよく手入れしてきた、伐採した木をシイタケのほだ木にしたり、薪として燃料にしたりしてきました。

雑木は伐採すると、翌年にはひこばえが出ます。普通、5年後くらいに「もやかき」という間引きをします。さらに10年後にもう一度「もやかき」をします。20年で元の大きさの林になり、また樹木として伐採して利用できます。温暖で湿潤な日本の気候では、木々の枝は少しくらい切ってもすぐに育ちます。「里山」はそれ自体がリサイクル可能な資源とっていいと思います。

祖父が亡くなって、これから父が定年に

次世代に残す「里山」

——コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

なったら福井へ帰って、山の管理も何とかしたいと言っていますが、その次の20年は、私たちの世代の役割です。「里山」の環境を守り続ける社会こそ、これからの日本に必要なものではないでしょうか。私は高校を卒業したら農業大学へ進学して、さらに農業技術の勉強をしたいと考えています。福井に限らず日本中で、ドジョウやオタマジャクシが棲める田圃、コウノトリが舞い戻ってくる田圃の自然環境を、私たちの代で取り戻したいと思っています。